

イタヤの木大きく空をかぎりたる秋末の國心地よきかな  
 されど十月に入りてよりは、思ひ出したるが如く、はた忘れたるが如く、はらはらと降り、カラリと晴るゝ雨の日いと多く、風また梢を揺りて、その度に山の梢は瘦せゆき秋末の哀れは何にもまして身をそゝるなり。  
 此の國の秋のをはりに降りつゝ、さらさら雨のうすらつめたさ  
 岩近く斜に雨の走りゆくそのあはれなる秋の終りよ  
 榎屋根に雨の叫く北國の秋の終りのいかに淋しき、  
 さやすやと風はゆくなり忍びつゝ風はゆくなり秋末のくに、  
 相寄りて涙なかしぬほろほろと風の吹く時梢と梢  
 日もすから冷たき雨と十月の風とこもこも我が雨戸うつ  
 紙障子はためかしゆく風といふいたづらもの

もあはれなる頃  
 我が咽に痛みあてへて十月の風梢ふき雨窓をうつ  
 さらさらと雨はふりけり北國の秋の終りのこの十日ほど  
 北國の冬は十一月よりとこそきゝるしにあはたしいしかな、神無月二十一日には五寸の初雪をみて、秋は降り續きし雨に、業に己に逝きたるなりけり。「九月より十月に」いかに短かき秋の命ならずや、  
 ○はしやぎたる春の華やかさは、寧ろ馬鹿氣たる氣味ありき。リリーと落葉松の梢を除きては、六月の藤花、櫻花散りての梅の花など、何ぞと詩興を惹くものぞ。あるほどの葉、あるほどの梢を、又あるほどの色に染めて、日に輝き、風に散る秋は、大自然かあらゆる偉觀と雄大と盡したる、本道唯一の好季なるべし。顧みれば「春より秋へ」これ僅に六ヶ月なり。花より紅葉にあはただしく移りゆきて、物思ふ（自然に對して）暇もなく、はやくも、今年の冬籠に入る、

灰色の低き空、鉛色の海、謎の如き雪の山は、起臥をする人に、何を語り、何をか思はする、北國の人と、南國の人とは、三歳にして、己に其の想ふ所を異にするなり。  
 (完)

十月二十二日

地名	氣 温		風 向		風 速	天 氣	
	最高	最低	風向	風速			
小樽	六〇	二〇	西北	—	—	雪	
青森	三一	一八	四	—	—	雨	
山形	七二	二一	六	西	三	快晴	
東京	九七	二一	七	—	—	快晴	
名古屋	七五	二五	〇	—	—	快晴	
金澤	一七	一一	四	—	—	晴	
松本	一一	二〇	二	南	南	七	晴
大阪	一〇	一一	九	北	東	三	快晴
下關	一六	二二	九	西	三	曇	
高知	九八	二五	四	南	西	四	快晴
熊本	八〇	二五	六	北	東	二	快晴
那覇	一九	二七	一	北	東	四	晴
澎湖島	二二	二六	一	北	東	一〇	晴
仁川	一五	一六	六	北	西	一三	快晴

●稟 告

一、本年度會費未納の方々は、なるべく早く御送附下されたく候。會費御送附は「東京女子高等師範學校内、伊澤光雄」宛になされたく候。なほ、他と混雜の憂なき様必ず、  
 「文科學術談話會々費」と御明記置き程願上候。  
 一、本誌第五號は明大正二年二月中旬發行の豫定に候間、御寄稿は同年一月末日迄に、東京女子高等師範學校附屬高等女學校内、千葉安良」宛に御送り下され度候。

(原稿は二十字詰二十行の用紙に御認め下され候はば尤も便宜に候)

大正元年十一月